The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	蘇る懐徳堂四書 ： 「儒蔵」編纂事業について
Author(s)	湯浅, 邦弘
Citation	懐徳堂センター報. 2009, 2009, p. 3-7
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24391
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『懐徳堂センター報』二〇〇九　（大阪大学大学院文学研究科・文学部懐徳堂センター　二〇〇九年二月二八日発行）

蘇る懐徳堂四書 ―「儒蔵」編纂事業について―

湯浅邦弘

平成十八年九月十八日付の郵便で、(財)東方学会理事長の戸川芳郎氏より、「儒蔵」日本編纂委員会委員への就任要請があった。「儒蔵」とは聞き慣れない名称である。さっそく依頼書の内容を熟読した。

それによれば、「儒蔵」編纂事業とは、北京大学など中国の約二十五の大学・研究機関が連携して進めようとしている一大事業で、儒学経典を網羅的に集成しようとするものである。中国では、宋代以降に仏教経典の「仏蔵」、道教経典の「道蔵」が編纂されているが、儒教経典を網羅した叢書の編纂は行われていない。そこで、北京大学の湯一介教授が主導して、二〇一〇年までに約一・五億字分を収録する「儒蔵」精華版を出版し、二〇二〇年までに約十五億字分を収録する完全版を出版するという企画を立てた。そして、日本に現存する貴重な漢籍についても、編纂協力の要請があったという。この要請を受けて設立されたのが、「儒蔵」日本編纂委員会である。

平成十八年十月八日、大東文化大学において第一回の会議が開催された。会議では、まず、「儒蔵」編纂事業の概要について説明があった。前記の精華版は、先秦から清末に至る代表的儒家典籍四六〇部、および韓国・日本・越南の漢文体で撰述された重要な儒学典籍約百部を収録し、完全版は、清末までの儒家典籍約五千部を収録するという。体例は縦組みで、校点・校勘・標点・分段を施したテキストを作成し、順次刊行するという。

配布された会議資料には、すでに「儒蔵」日本版の候補として、藤原惺窩、林羅山、中江藤樹から竹添井井までの三十八名の著者および著述が列挙され、また、その校訂・解題執筆に当たる候補者名まで記されていた。

筆者に依頼されたのは、中井履軒の四書、すなわち『大学雑議』『中庸逢原』『論語逢原』『孟子逢原』の四部、総字数三十五万五千字分である。もとより、このような作業を一人で担うのは無理であり、それぞれの委員は、協力者を推薦するよう求められた。

これを受けて、筆者は、懐徳堂研究に実績のあるメンバー十四名に呼びかけ、協力を要請した。要請に応じていただいたのは、以下の各氏である（所属・職名は平成十八年現在）。

寺門日出男（都留文科大学教授）
竹田　健二（島根大学教授）
杉山　一也（岐阜経済大学准教授）
藤居　岳人（奈良工業高等専門学校准教授）

「儒蔵」既刊分（一部）

矢羽野隆男（四天王寺国際仏教大学准教授）
湯城　吉信（大阪府立工業高等専門学校准教授）
久米　裕子（京都産業大学准教授）
井上　　了（大阪大学懐徳堂センター職員）
池田　光子（大阪大学助教）
前川　正名（台湾・致遠管理学院助理教授）
佐野　大介（台湾・明道大学助理教授）
黒田　秀教（台湾・明道大学助理教授）
上野　洋子（日本学術振興会特別研究員）
草野　友子（大阪大学大学院生）

メンバーによる第一回会議を開催したのは、平成十八年十二月十六日。大阪大学で、「儒蔵」編纂事業の概要を説明し、テキストの選定と事業分担について検討した。その結果、懐徳堂四書については、『日本名家四書注釈全書』本を底本とし、大阪大学懐徳堂文庫所蔵中井履軒手稿本を対校テキストとすることが決まった。

その後、「儒蔵」日本編纂委員会との連絡調整を経て、平成十九年十二月、編纂委員会から底本の全コピーが送られてきた。これを受けて、第一期提出分として、『大学雑議』『中庸逢原』『論語逢原』の三点について作業を開始した。第一期分の原稿締切は、平成二十年九月末、第二期分は平成二十一年三月末である。そこで、具体的な分担を次のように定めた。

【第一期分】

『大学雑議』全　……湯浅邦弘
『大学雑議』解題……湯浅邦弘

『中庸逢原』全　……池田光子
『中庸逢原』解題……池田光子

『論語逢原』

序説・学而・為政・八佾……久米裕子
里仁 ……寺門日出男
公冶長 ……竹田健二
雍也 ……杉山一也
述而・泰伯……藤居岳人
子罕・郷党……矢羽野隆男
先進・顔淵……湯城吉信
子路・憲問……井上　了
衛霊公・季氏・陽貨・微子……佐野大介・黒田秀教
子張 ……上野洋子
堯曰 ……草野友子

『論語逢原』解題 ……久米裕子

【第二期分】

『孟子逢原』

序・梁恵王上……寺門日出男
梁恵王下……竹田健二
公孫丑上……杉山一也
公孫丑下……藤居岳人
滕文公上……矢羽野隆男
滕文公下……湯城吉信
離婁上……久米裕子
離婁下……井上　了
万章上……池田光子
万章下……前川正名
告子上……佐野大介
告子下……黒田秀教
尽心上……上野洋子
尽心下……草野友子

『孟子逢原』解題……池田光子

作業は、ほぼ順調に進み、平成二十年十月、第一期分として『大学雑議』『中庸逢原』『論語逢原』の三つの原稿を、編纂委員会事務局である東方学会に提出した。

この作業は、要するに、テキストを校勘して、底本との異同を明示すること、現代中国式の標点を打つこと、が主な内容である。『大学雑議』を例にその凡例を示すと次のようになる。

【凡例】

・『日本名家四書注釈全書』所収『大学雑議』を底本として、その標点・校勘を付す。

・標点は、「儒蔵」編纂事業の原則に従い、日本式の句読点「、」「。」によらず、現代中国式の標点による。主なものは次の通りである。

読点……「，」（日本式の「、」に相当）

句点……「。」「？」「！」（日本式の「。」に相当）

並列区切り符号……「、」（日本式の「・」に相当）

書名・篇名……《　》（日本式の『　』「　」に相当）

引用の開始符号……「：」（日本式の「、」に相当）

・校勘は、大阪大学懐徳堂文庫所蔵中井履軒手稿本『大学雑議』との校合を行い、その結果を段落ごとに注記する。但し、『日本名家四書注釈全書』は刊本、懐徳堂文庫本は抄本であるため、いわゆる異体字の類は無数にある。ここでは、原則として、異体字については校勘の対象とせず、文意に相違が出てくる字句についてのみ、その異同を明記することとした。

・校勘の書式は、概ね次のようにする。

①「※」字、履軒手稿本無。

（底本の文字が履軒手稿本にない場合）

②「※」字、履軒手稿本作「△」。

（底本と履軒手稿本とで文字が異なる場合）

③「※」字前、履軒手稿本有「◆◇」二字。

（底本にはない字句が履軒手稿本にある場合）

④此句履軒手稿本作「※◆◇」。

（底本の一句が履軒手稿本では異なる字句となっている場合）

⑤此句當作「※◆◇」。

（明らかな誤記と思われる場合）

また、校勘・標点の実例を、やはり『大学雑議』の冒頭部によって以下に示してみよう。

大學　天樂樓章句

大學之道，在明明德，在新民，在止於至善。知止而后有定，定而后能靜，靜而后能安，安而后能慮，慮而后能得。《詩》云：「邦畿千里，惟❶民所止。」《詩》云：「緡蠻黃鳥，止于丘隅。」子曰：「於止，知其所止，可以人而不如鳥乎。」《詩》云：「穆穆文王，於緝熙敬止。」爲人君，止於仁。爲人臣，止於敬。爲人子，止於孝。爲人父，止於慈。與國人交，止於信。《詩》云：「瞻彼淇澳，菉竹猗猗。有斐君子，如切如磋，如琢如磨。瑟兮僩兮，赫兮喧兮。有斐君子，終不可諠兮。」如切如磋者，謂學也。如琢如磨者，自脩也。瑟兮僩兮者，恂慄也。赫兮喧兮者，威儀也。有斐君子，終不可諠兮者，道盛德至善，民之不能忘也。《詩》云：「於戲前王不忘。」君子賢其賢而親其親，小人樂其樂而利其利，此以沒世不忘也。

右第一章

（校勘）❶「惟」字，履軒手稿本作「唯」。

こうして、第一期分は予定通りに出稿できた。ただ、我々は、この作業結果を編纂委員会に提供するだけではなく、独自に電子データとして蓄積し、公開したいと考えている。具体的には、大阪大学文学研究科および（財）懐徳堂記念会の協力を得て、「懐徳堂四書」電子版の制作・公開を予定しているのである。その全容公開は、第二期分の稿了を待って順次進めていきたい。これにより、二百年の時を越えて懐徳堂四書が蘇るのである。

なお、平成二十年十二月に入って、「儒蔵」日本版の編次原案が明らかにされた。それによれば、日本人撰述者ごとに巻を分け、以下のような計十六分冊になるという。

経部

①太宰春台『詩書古伝』、岡白駒『詩経毛伝補義』

②仁井田南陽『毛詩補伝』

③竹添井井『左氏会箋』上

④竹添井井『左氏会箋』中

⑤竹添井井『左氏会箋』下

⑥山井崑崙『七経孟子攷文』、林秀一『孝経述義』

⑦伊藤東涯『周易経翼通解』、伊藤仁斎『語孟字義 附大学非孔子遺書弁』『大学定本』『中庸発揮』『論語古義』『孟子古義』

⑧荻生徂徠『大学解』『中庸解』『論語徴』、太宰春台『論語古訓』『論語古訓外伝』

⑨中井履軒『大学雑議』『中庸逢原』『論語逢原』『孟子逢原』、佐藤一斎『四書欄外書』

⑩吉田篁墩『論語集解攷異』大田錦城『論語大疏』、市野迷庵『正平本論語札記』

⑪山梨稲川『文緯』、松崎慊堂『宋本爾雅校譌』、岡本況斎『説文解字疏』

史部

⑫原念斎『先哲叢談』（正編・後編・続編・近世正続）、中江藤樹『藤樹先生遺稿』、熊沢蕃山『蕃山先生行状』

⑬蘆野東山『無刑録』

⑭林鵝峰『本朝通鑑抄』、安積澹泊『大日本史賛藪』

子部

⑮山崎闇斎『闢異』、貝原益軒『大疑録』、荻生徂徠『弁道』『弁名』、新井白石『国書復号記事』、伊藤東涯『古今学変』、三浦梅園『贅語』、皆川淇園『名疇』『問学挙要』

集部

⑯藤原惺窩『文章達徳綱領』、林羅山『羅山先生文集』『羅山先生年譜・行状』、林鵝峰『鵝峰先生林学士文集』